

## 開催報告

## 秋学期FDプログラム

## 「大学の授業における著作権 —教材を適切に作成し、使用するために」

[2024年12月4日]

大学教育開発・支援センターでは、大学の授業で使用する教材の作成及び利活用の方法が多様化していることをうけ、著作権の基本的事項や教材作成・利活用に関連するポイントについての理解を深める機会を提供することを目的として、秋学期FDプログラム「大学の授業における著作権 —教材を適切に作成し、使用するために」を開催しました。講師には、著作権について造詣が深く、高等教育機関や学会等にて数多くの講演を担当されてきた石島寿道先生(学術著作権協会 事務局長)をお招きしました。当日は50名を超える教職員の方々にご参加いただきました。



石島寿道先生

講演の前半では、著作権法の成り立ちから近年の法改正までの流れと著作権法の基本的事項について網羅的に解説いただきました。著作権法で規定されている権利関係の条文を示していただき、とりわけ教育活動の中で注意すべき権利制限規定のポイントについて詳しく説明いただきました。

講演の後半では、大学での教育活動により焦点を当て、授業における著作物利用について説明いただきました。著作権法第35条「学校その他の教育機関における複製等」の改正内容の解説を中心に、電子化された教材の適切な取り扱い方法や許諾を要する著作物の利用方法の具体的な例を示してくださいました。終盤には、生成AIを活用するうえでの著作権のポイントと注意点についても取り上げていただきました。

なお、プログラム開始前から、参加登録フォームを通じ、多くの質問が

寄せられました。日々の授業準備・実践に関連する具体的な質問が多く寄せられ、著作物の取り扱いに対する日常的な関心の高さをうかがい知ることができました。FDプログラム終了後の参加者アンケートでも、今回のFDプログラムに満足しましたかという質問に対し、「そう思う」と「ややそう思う」を合わせた回答が9割を超えました。また、「FDプログラムで得た知見を日々の授業実践に活用できると思いますか」という質問にも、多くの肯定的な回答をいただきました。参加者からは「教員が感じている不安の解消に繋がった」「実用的なテーマでとても良かった」(抜粋)等の感想が届きました。

現在、立教大学では様々な形態で授業が実施されており、様々な形式の教材が使用されています。また、生成AIの登場やLMSの活用が進む中で、教材の作成及び利活用の方法の多様化がより一層進むことが予測されます。大学教育開発・支援センターは、今後も著作権の動きを注視し、教職員の皆様に役立つ情報を提供できるような企画を立案・実施してまいります。

最後に、ご登壇いただいた石島先生、ご参加いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。

助教 豊田 英嗣

## 目次

1. 著作権法の成り立ちと近年の法改正の動向
2. 著作権の基礎知識
3. 授業における著作物利用について
4. 生成AIと著作権の関係

## ▲プログラムの内容

次ページ「学修成果ルーブリックの活用からみえてきた課題」インタビュー

## 当センターからのお知らせ(本学教職員向け)

## ■ 動画「大学の授業における著作権 —教材を適切に作成し、使用するために」

上記秋学期FDプログラムの動画を公開しました(本学教職員限定)。  
[https://spirit.rikkyo.ac.jp/cdshe/lecture/SitePages/fd\\_copyrigh\\_20241204.aspx](https://spirit.rikkyo.ac.jp/cdshe/lecture/SitePages/fd_copyrigh_20241204.aspx)

## ● 各種ルーブリック、「ルーブリック活用ガイド」のご案内

大学教育開発・支援センターのホームページでは、『Master of Writing』に対応する「論証型レポート・ルーブリック」、『Master of Presentation』に対応する「プレゼンテーション・ルーブリック」のテンプレートや、「ルーブリック活用ガイド」が用意されています。ぜひ活用ください。詳細はこちら(本学教職員限定)。  
<https://spirit.rikkyo.ac.jp/cdshe/journal/SitePages/rubric.aspx>



# Rikkyo Education

Rikkyo Educationは、立教大学で行われている授業実践や教育上の取り組みを紹介するコーナーです。立教大学では2021年度に全学部において、学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)に基づいた「学修成果ルーブリック」が作成されました。今号では、「学修成果ルーブリック」を実際に活用した異文化コミュニケーション学部の教員にインタビューを行い、実践を通じてみてきたポイントや今後の活用可能性及び課題について伺いました。

## 学修成果ルーブリックの活用からみてきた課題

師岡 淳也教授(異文化コミュニケーション学部)



### ルーブリックとは？

評価観点(赤枠)と評価尺度(青枠)を組み合わせ、それに基づく評価基準(記述語)(緑枠)を示した表を活用し、学生の学びの質を、教員・学生相互にわかりやすく、短時間かつ公正に評価するための方法、また、そのツールのことです。

評価観点	評価尺度	評価基準(記述語)
1. 基礎知識の習得	1. 基礎知識の習得	基礎知識を習得し、理解している。
2. 基礎技能の習得	2. 基礎技能の習得	基礎技能を習得し、理解している。
3. 応用知識の習得	3. 応用知識の習得	応用知識を習得し、理解している。
4. 応用技能の習得	4. 応用技能の習得	応用技能を習得し、理解している。

## —学修成果ルーブリックの活用について

異文化コミュニケーション学部では、学修成果ルーブリックをどのように活用していますか。

師岡：異文化コミュニケーション学部では、他学部と同様に2021年度に学修成果ルーブリックを作成し、翌年度から活用し始めました。2022年度は全学年を対象に、年次ごとにルーブリック評価を行いました。1年次は必修科目の「基礎演習」にて、2年次も必修科目の「Cultural Exchange」にて、3年次は「専門演習」と呼ばれるゼミで、4年次は学位授与式でそれぞれルーブリックを使用した自己評価を実施しました。2023年度は1年次と4年次を対象に、それぞれウェルカムアワーと学位授与式にて実施しました。

異文化コミュニケーション学部の学修成果ルーブリックは、6つの「評価観点」と5つの「評価尺度」で構成されています。実施の際には、学修成果ルーブリック上段に該当する年次を選択する欄を設けて印刷し、学生自身に自分が当てはまると思う「評価基準(記述語)」の箇所につけてもらいました。その際には、具体的な手順がわかるように、記入方法と記入例を合わせて配布しました。集計したデータは、学部内で実施しているFD会議にて結果を共有しています。

当時、私は教務委員長・学科長を務めていたので、その業務の一環として、評価を実施する科目の選定や実施依頼を行いました。科目内で実施する際には、担当教員と連携しながら、評価シートの準備・配布・回収までを行いました。ウェルカムアワーや学位授与式での実施の際には、学部事務にも協力していただきました。

## —活用後の発見と難しさ

学修成果ルーブリックを活用することで、どのような発見がありましたか。

師岡：結果をまとめて思ったことは、総じて、年次を追うごとに評価の数値が向上しており、卒業時までには評価尺度4に達するという想定していた通りの数値が出ていることでした。異文化コミュニケーション学部の学びは学際性が高いこともあり、学生

評価観点	評価尺度	評価基準(記述語)
1. 基礎知識の習得	1. 基礎知識の習得	基礎知識を習得し、理解している。
2. 基礎技能の習得	2. 基礎技能の習得	基礎技能を習得し、理解している。
3. 応用知識の習得	3. 応用知識の習得	応用知識を習得し、理解している。
4. 応用技能の習得	4. 応用技能の習得	応用技能を習得し、理解している。

一つの外国語については研究や仕事で求められる高度な言語運用能力を身につけている。もう一つの外国語については、幅広い話題についてやり取りができる。複数の外国語を用いた複数の文化の経験を通して、自身の文化を相対化し、自身の文化と他文化との境界線、文化間の関係性、複言語・複文化主義のあり方を問い直すことができる。

自身も教員もこれまで学生の学修成果の推移を把握することが難しかったです。しかし、ルーブリック評価を導入したことで、学生が何をどこまで学べたと認識しているのかを年次ごとに数値化することができました。数値はあくまで学修成果の指標の一つですが、この点は収穫だったと思います。

まだ始めたばかりですので、現時点でのデータでは、年次ごとに対象が異なります。しかし、継続することで入学時から卒業時までの自己評価の推移を把握できるようになると考えています。また、異文化コミュニケーション学部の場合は、2024年度から定員が増えたので、その影響を見ることもできるかもしれません。

**学修成果ルーブリックを活用してみて、どのような難しさがありましたか。**

**師岡：**何のためにルーブリック評価を実施するのか、得られたデータをどのように活用するのかについて、学部内で議論を深め、共通認識をもつことが難しいと思いました。ルーブリック評価の作成やデータ収集に関心を持ち、意義を見出している教員はまだ少ないと思います。ルーブリック評価がどのように役立つのか、その認識を教員間で高めていくことが、学部としてルーブリック評価を継続的に実施していくためには不可欠だと思います。

そして、ルーブリック評価の意義を学生に認識してもらうことも大切です。ルーブリック評価の目的の一つは、学修者自身が定期的に取り組み、どの部分が伸び、どの部分が伸びていないかを把握したうえで、今後の学修計画に役立てることにあります。しかし、現状では、こうした学修成果ルーブリックの魅力や活用方法を学生に十分に伝えられていません。このような取り組みは一人の教員でできることではないので、学部全体としてルーブリックの活用を推進することが必要になってきます。

加えて、ルーブリックの内容や構成について学生の考えを聞いてみた方が良いと思います。教員と学生の間では、しばしば学修に対する考えにずれが生じます。例えば、教員がルーブリックの記述語を考えると、専門的な言葉を使ってしまいがちです。今回のルーブリックをみても、分量が多いですね。そして、例えば、記述語に含まれる「複言語・複文化主義」という言葉をとっても、学生がその理念や歴史的背景をどれだけ理解できているのかわかりません。そのため、「複数の言語や文化を十分に理解できている」等と言い換えた方が学生にはわかりやすいかもしれません。ルーブリックの活用を促すためには、学生に馴染みのある言葉を使って、魅力を感じられるルーブリックを作ることが大切です。

一方で、教員側のジレンマもあります。例えば言語能力については、外部試験を受けてもらえば、そのスコアの推移で学生の伸びをある程度把握できるかもしれません。しかし、今回のようにディプロマ・ポリシー（DP）に基づいてルーブリックを作成すると、複言語・複文化主義といった理念的な概念を学修成果ルーブリックに反映させる必要が出てきます。

こうしたジレンマはありますが、ルーブリック評価はもともと対象者が何を学んでいるのかを見ていくためのものだと思います。したがって、教員が何を教えたか、教えたいかよりも、学生が何を学んだと認識しているのかという学修者目線に立ってルーブリックを作成することが基本だと思います。

## —今後の活用可能性と課題

**学修成果ルーブリックは今後どのように活用可能でしょうか。**

**師岡：**ルーブリックはあくまで手段であり、目的は学生の学びをつかむことです。私を含めて教員は、学生がDPを達成できているかを印象論で語りがちです。そうした教員の経験に基づく意見も大事ですが、ルーブリック評価は、学生自身の自己評価や学修成果の認識に関する全体的な傾向を踏まえて議論することを可能にしてくれる点で有用だと思います。ルーブリック評価を通して蓄積されたデータを参考にしながら授業改善やカリキュラム改革について話をするので、より生産的で建設的な議論ができると思います。

理想を言えば、学修成果ルーブリックの評価について学生と教員が話し合う場があるといいのかもしれません。単に自己評価を個別に記入して終えるのではなく、「この部分ではできているね」「なぜそこができていないのか」等、学生と教員のコミュニケーションの材料として使用することで、教員は学生の学びの軌跡や癖を理解し、学生の特性をより深く知ることができると思います。

さらに、キャリア教育の観点からみても有益かもしれません。もともと、学修成果ルーブリックの「評価尺度」の設定については、卒業時に全て4（4年間で達成＝DPを満たすレベル）や5（理想的な姿）に達する必要はなく、その後の社会人経験を



インタビューの様子

通して5の評価に近づいていくというイメージを持っていました。卒業時点での自己評価を把握することで、学生は自分の現状の立ち位置を理解し、その後のキャリアを考える材料にすることができると思います。

**学修成果ルーブリックを今後も活用していくためには、どのような課題があるでしょうか。**

**師岡：**学修成果ルーブリックの質を上げていくことが課題です。既存のルーブリックが本当に測りたいものを正確に測れているのか、妥当性と信頼性を上げていくことが必要だと思います。ただし、異文化コミュニケーション学部の場合は、学修評価の専門知識をもつ先生がいないので、専門的なサポートが必要になります。

また、国内外における他大学の取り組み事例についても知りたいところです。

また、異文化コミュニケーション学部には、文化人類学や通訳翻訳研究、カルチュラル・スタディーズ等、様々な分野の専門家が集まっています。そのため、教員によって望ましい学修成果のイメージが異なることもあるでしょう。こうした学際性を反映させながら、最大公約数的な学修成果ルーブリックを作ると、どうしてもそれぞれのニーズから離れてしまう可能性があります。将来的には、学部内でも複数のバージョンを作成する等の工夫が必要となるかもしれません。

インタビュアー：高林 陽展（副センター長）、豊田 英嗣（助教）

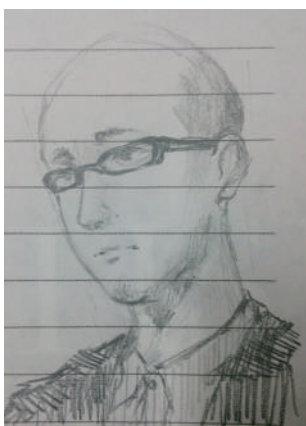
インタビューまとめ：豊田 英嗣（助教）

## 新・副センター長あいさつ

当センターでは2024年4月に副センター長が交代しました。以下に、新・副センター長からのメッセージをお届けします。

副センター長・TL（Teaching & Learning）部会長

**高林 陽展**（文学部教授）



2024年4月に、大学教育開発・支援センター副センター長（TL部会・部会長）を拝命しました。

TL（Teaching & Learning）部会は、立教大学の教育の質を向上させ、その未来のあり方を構想してゆく、全学的な組織です。私は、2018年度以来複数の年度にわたって、このTL部会の活動にかかわってきました。その活動は、FD（ファカルティ・ディベロップメント）の実践になるわけですが、当初は少し警戒心をもって臨んでいた気がします。それというのも、FDは、大学によ

ては、教員の自主性や専門性を置き去りにした、トップダウンで半ば強制的に行われるもののように感じる機会が多かったからです。特定のやり方でなければ授業の質は上がらないのだと一方的に言われることは、日々真剣に授業に向き合っている多くの教員にとって心地よいものではありません。

しかし、立教大学の大学教育開発・支援センターでは、「自由の学府」の名にふさわしいFDが展開されていました。TL部会が主催する授業改善のためのワークショップやシンポジウムに参加される先生方はみな、授業がどうすればよくなるかを真剣に考えて集っている先生方ばかりであり、分野は違えども、それぞれの専門性には互いに敬意を払い、よりよい教育を目指す自主性あふれる場になっています。立教の教育を支える、このセンターのさらなる発展に微力ながら貢献したいと思っております。

編

今号では、「学修成果ルーブリック」についてのインタビューを取り上げました。大学での学びは多岐にわたり、ルーブリックで可視化できる学びはその一部にすぎません。とはいえ、一部でも学修内容を客観的に把握できれば、その後の学修計画や授業デザインに役立てられることも多いかと思えます。インタビュー記事を通して、「学修成果ルーブリック」がツールとして持つ可能性を感じていただけましたら幸いです。当センターは、今後も大学での学びや教育の助けとなりうる情報を精力的に発信してまいります。（豊田）

集

後

記

## 「MOVE 第33号」

立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会 ニュースレター

2025年3月26日発行

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会  
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1  
Tel: 03-3985-4624 Fax: 03-3985-4615  
E-mail: cdshe@rikkyo.ac.jp



<https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html>